

正真正銘、これが堀辺正史“今生最後のお話”!!

日本武道傳骨法創始師範

堀辺正史

“生死”を自分の生活の中に捉えたときに
“精神性”というものが
初めて誕生するんです!!

聞き手／山口日昇

『葉隠』について堀辺先生に聞いた。そしてこれから読んでいただく話をし終わった翌日に堀辺先生は亡くなった。よりによって「死」について話を聞いた翌日、唐突に、本当に唐突に、堀辺先生は旅立たれた。当たり前だが、堀辺先生が亡くなることを見越して、この特集を組んでいたわけではない。とても信じられなかったが、人は死ぬのだ。堀辺正史、最後の話の芯を、じっくりと読みとっていただきたい。

相手が殿様であるうと將軍であるうと

文句は言うのがサムライの精神!

それが『葉隠』の一貫した考え方なんです

山口 先生、武士にとっての最大の徳目である「名誉」、そしてその対にある「恥」という概念を、新渡戸稲造の『武士道』をテキストにして前回は語っていただきました。で、武道とは切っても切れない武士道という概念を知るにあたって、今回は山本常朝の『葉隠』の芯となる部分を教えていただきたいと思えます。

堀辺 はい、よろしくお願ひします。

山口 なんとなく知っているつもり『葉隠』という書物が、なぜいまでも語り継がれているのか。はたしていまの社会に役立つヒントとしてはどんなところに注目すればいいのかを知りたいんです。まずは『葉隠』の有名な一節である「武士道とは死ぬことと見つけたり」というのが、何を意味しているのかを教えてください。

堀辺 まず押さえておかなければならないのが、『葉隠』は平和な江戸時代の武士が書いた思索の書だということです。山本常朝は八代將軍・徳川吉宗の時代の人で、赤穂浪士の批判も行ってた。そういう時代の人です。あの当時は、サムライはもうただの戦闘者ではないんです。いまでは、行政官僚だったり、政治家のトップだったりとい

“武士道といふは、死ぬ事と見附けたり。二つ二つの場にて、早く死ぬ方に片附くばかり也。別に仔細なし。胸据わって進む也。刃に当たらぬは犬死などといふ事は、上方風の打上がりたる武道なるべし。二つ二つの場にて刃に当たるやうにする事は及ばざる事也。我人、生くの方が好き也。多分好きの方に理が附くべし。若し刃にはずれて生きたらば腰抜け也。この境危うき也。刃にはずれて死にたらば、犬死氣違也。恥にあらず。これが武道に丈夫也。毎朝毎夕、改めては死に、常住死身なりて居る時は、武道に自由を得、一生落度無く、家職を仕果すべき也”

—『葉隠』より抜粋—